

Argentina

アルヘンティーナ

No. 75



ウマウアカ峡谷、フワイ州 (在日アルゼンチン大使館ご提供)

一般社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2025年7月

理事長ご挨拶 (永井慎也)	2	懇親会報告 (宍戸和郎)	8
日本におけるタンゴの歴史と現在 (その2) (飯塚久夫)	2	総会・理事会報告 (阿部和子)	10
ジェトロ・ブエノスアイレス便り (西澤裕介)	5	Resumen en castellano (Irene Gashu)	11
ブエノスアイレス生活事情~日本人の住み心地~ (大迫淳)	6		



理事長ご挨拶

アルゼンチンの魅力(ミレイ大統領の施策)

永井 慎也

はるか地平線まで続く広大な緑の大地、膨大な水の量が途切れることなく流れ落ちるイグアスの滝、広々とした大地とその後ろにある高山の連なるパタゴニア、目前で轟音とともに崩れ落ちる氷河の壁、などアルゼンチンの自然の魅力は、枚挙に事欠きません。

もちろん、アルゼンチン牛肉のアサード、マルベックのほか、多くの食べ物、飲み物の魅力も、世界有数のものであります。

しかし、ここで強調したいのは、アルゼンチンの人々の優秀さです。例えば、先のローマ法王はアルゼンチンの大司教（私はカトリック教徒ではありませんが、アルゼンチン駐在大使の際、同大司教に招待されてミサに出席したことがあります。）であり、中南米から選出された初の法王です。後任の、現法王は、アメリカ出身であり、この点が話題になっていますが、ペルーでの布教活動も約20年にもわたり、ペルー国籍をも取得されておられるようです。このペルーでの活動が、前の法王の目にとまり、ご縁ができたようです。その他、国際機関（国際原子力機関事務局長など）や、分野は異なりますが、文学などにも、優秀な人材を輩出しています。

そして、アルゼンチンの最優秀な人材の一人として、ミレイ大統領が、現在、自由主義者としての施政を実施しており、国際的な注目を集めています（ミレイ大統領は、トランプ大統領が就任式前に最初に会見した外国元首です。）。省庁を半減するなど財政赤字の改善に努めており、これまでのポピュリズムによる施策と一線を画すものです。今後は、財政基盤を整えたいうで、新しい産業政策の実施に取り掛かるものと思われ、その成功が期待されます。

我が国も、自由主義をベースのひとつとするものであり、同大統領のもと、今後、両国関係が更なる発展を遂げることが、大いに期待されます。

末筆で恐縮ですが、会員の皆様のご健康とご多幸を心より祈念申し上げます。

(ながい しんや：当協会理事長・元アルゼンチン大使)



日本におけるタンゴの歴史と現在（その2）

飯塚 久夫

前号（その1）の最後に述べた1953、54年の藤沢嵐子、早川真平の訪亜は、日本のタンゴの状況を本場に知らしめて、「タンゴ第二の故郷」日本の礎を築いたこともさることながら、他に大きな成果をもたらしてくれました。その最たることは、54年、既に名声を確立していたオスバルド・プグリエーセ楽団の第2バンドネオン奏者であったホルヘ・カルダーラ（1924～67）を日本に招聘、本人の帰国時に家族ともども帯同し、日本の楽団の指導とともにオルケスタ・ティ

ピカ東京の客員として舞台でも活躍してもらったことでしょう。それは9ヶ月間続きました。その流れは59年、チェロ奏者のリカルド・フランシア（88、89年に再来日）や、1961～63年、バンドネオン奏者のフェルナンド・テル（1921～95）の来日という日本タンゴ界を盛り上げてくれる出来事に繋がっていきます。特にテルは、ライブハウス“シャンテ”出演を始めとしたステージのみならずラジオ、テレビ出演、レコード録音にも活躍しました。加えてテルは日本のタンゴ同好会、



1953年9月ペロン大統領主催のコンサートに出演した新聞記事(右はディセポロとトロイロ@ディセポロ劇場)

特にSUIYOKAI(すいようかい、別名タンゴ・スエニョス)の例会や親睦会に來会するなど多くのタンゴ・ファンとも親交を結びました。その頃には全国各都道府県には一つ以上あったタンゴ同好会も現在は殆どなくなりましたが、このSUIYOKAIは今日まで続いており、2025年3月に設立70周年、レコード・コンサート800回記念会を迎えています。

さて、話は少し戻りますが、1945年、終戦とともに軽音楽の開放がなされ、日本におけるタンゴの復活も進みます。46年にはNHKラジオの「ポルテニア音楽の時間」、47年「中南米音楽の時間」、48年「ラテン・アメリカ音楽の時間」、51年にはラジオ東京(現TBS)の発足とともに「ポルテニア音楽の時間」、52年NHK「リズム・アワー」などと続き、放送分野でも着々とタンゴ・ファンの渴望が癒やされていったのでした。

そして1955年、東芝エンジェル・レコードの登場を記念して、文化放送系のラジオで「これがタンゴだ!」が始まりました。フランシスコ・カナロ楽団の軽快なミロンガ「エル・ジョロン(泣き虫)」の調べ



若き日の藤沢嵐子

によって、折しも来日中のホルヘ・カルダーラによる『エス・エス・エル・タンゴ・ポルテーニョ! (これがタンゴだ)』という語りとともに、日本のタンゴ・ファンの急速な拡大が始まりました。この語りのイニシャルをとったETPタンゴ・クラブ、また1952年から発刊されていた

雑誌「中南米音楽」、各地でのタンゴ同好会などの充実も目覚ましく進展しました。ラジオ放送から3年経った1958年、オデオン、パンパ、パテなどのレーベルも加えた東芝レコードより当時の名曲・名演を選びすぎて「これがタンゴだ!」のLPレコードが発売されることになりました。以来10年間、ラジオとの連動企画として、アルゼンチンの独立記念日(7月9日)に合わせ、毎年1枚のLPがファンの人気投票も反映する形で発売され、全国28の放送局から流れるラジオ番組と相俟ってタンゴのベストセラーとなり、日本のタンゴ・ファンの期待に応えたのでした。レコードの解説(ライナーノーツ)も第1回から4回が高山正彦、5回が高橋忠雄、6回が青木啓、7回から最後の10回が藤波栄と、当時のタンゴ解説陣のトップが勢揃いしました。藤波栄というのは、東芝レコードのアルゼンチン関係顧問中島栄司のペンネームです(実はこの人は、東芝レコードの洋楽本部長であった筆者の伯父とともに、私のタンゴ経歴の恩人です)。



オルケスタ・ティピカ東京(中央が藤沢嵐子
その左が早川真平1953年文化放送にて)

話を日本のタンゴ楽団に戻します。1947年に早川真平が“オルケスタ・ティピカ東京”を結成し、麴町の“クラブ・エスカイヤ”に出演します。46年のNHK「ポルテニア音楽の時間」から巣立った二人、早川真平と原孝太郎、後者は“原孝太郎と東京六重奏団”を結成していましたが、1950年当時、藤沢嵐子は原孝太郎楽団に所属していました。そこから早川真平が藤沢嵐子を強引?にスカウトして、ここに日本タンゴ界のゴールデンコンビが誕生します。

1954年には本場のトップ楽団、ファン・カナロ楽団が来日し、歌手マリア・デ・ラ・フエンテを帯同し、日本のタンゴ・レベルは弾く者、歌う者、聴く者いず

れにも大きなレベルアップをもたらしてくれました。1955年にはダリエンソ・スタイルを標榜した西塔辰之助と“オルケスタ・ティピカ・パンパ”が結成され、57年には上野に“金馬車会館”が開店し、カフェ・コンサート時代にもなります。そこでは坂本政一と“オルケスタ・ティピカ・ポルテーニャ”が常時出演しました。その頃の店としては下記の名前が人々を沸かせました。

- ・新宿“ラ・セーヌ”
- ・渋谷“プリンス”
- ・日比谷“シャンテ”
- ・新橋“フロリダ”
- ・銀座“コロンビア”“白馬車”“新世界”

1950年頃、日本のタンゴ楽団は22楽団ほどになり、そして1965頃まで多数の楽団が存続しました。1955年から65年頃の楽団名を列挙してみます。まさしく“オルケスタ・ティピカ”オンパレードです。

- ・早川真平とオルケスタ・ティピカ東京
- ・坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテーニャ
- ・西塔辰之助とオルケスタ・ティピカ・パンパ
- ・伊吾田勇三とオルケスタ・ティピカ・ブエノス・アイレス
- ・小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス
- ・池田光夫とオルケスタ・ティピカ・サン・テルモ
- ・中田修とオルケスタ・ティピカ・アルヘンティーナ
- ・相馬昭三とオルケスタ・ティピカ・オルガニート
- ・永沢金衛オルケスタ・ティピカ・モンテロス
- ・梅川健とオルケスタ・ティピカ・ビクトリア
- ・志賀清とオルケスタ・ティピカ・モデルナ
- ・石居庸介とオルケスタ・ティピカ・マリーヌ
- ・土山佳一とオルケスタ・ティピカ・ラバナ
- ・藤岡啓郎とキンテート・ロス・ミロンゲーロス
- ・前田照光とノベルティ・シックス
- ・岡本昭とトリオ・ティピコ
- ・田島義之とコンフント・デ・ギタラス
- ・河内敏昭とトリオ・ロス・パジャドーレス
- ・横山良造とタンゴ・デ・モーダ
- ・ロス・インディオス
- ・フェルナンド・テル・トリオ



ニューヨークのシャトー・マドリッドに出演の坂本政一と
オルケスタ・ティピカ・ポルテーニャ

そして何と言っても頂点は1961年のフランシスコ・カナロ楽団の来日です。

さらに、1964年、オラシオ・サルガン率いる“キンテート・レアル”、65年、タンゴの真髄オスバルド・プグリエーセ楽団の来日は、本場のタンゴの変容（高度化）をまざまざと見せつけてくれました。66年フロリンド・サツソーネ楽団、67年アルマンド・ポンティエル楽団、キンテート・グローリア、ロス・セニョーレス・デル・タンゴ、68年（飛行機嫌いのマエストロ抜きの）ファン・ダリエンソ楽団、69年キンテート・ブエノスアイレス、ファン・カンバレリと、本場の楽団の来日も続きました。



1960年代の藤沢嵐子

楽団もさることながら、その頃はいわゆる“タンゴ喫茶”も花盛りで、東京都内だけでも15カ所ほどありました。

こうして昭和タンゴ・ブームとも言うべき1950～60年代の日本のタンゴ黄金時代が花咲いていきました。

(いづか ひさお：日本アルゼンチンタンゴ連盟&
日本タンゴ・アカデミー会長、当協会理事)



ジェトロ・ブエノスアイレス便り

西澤 裕介

2023年12月10日にハビエル・ミレイ政権が発足してから約1年半が経過しました。政権発足から約7カ月が経過した2024年6月に「アルゼンチン人の自由のための基盤および出発点に関する法律」（通称：オムニバス法または基盤法）が上下院で可決され、7月5日に規制緩和・国家改造省が設立されて以降、ルイス・カプート経済相が担うマクロ経済の安定化とフェデリコ・スツルツェネガー規制緩和・国家改造相が担う規制緩和の両輪がうまく回ることで、経済は徐々に安定してきました。基盤法は、行政、経済、財政、エネルギーの各分野における非常事態を宣言し、行政府に1年間、これらの分野の立法権を与えるだけでなく、国家機構の縮小、炭化水素の貿易自由化などエネルギー政策の改革、労働制度の近代化を政府が推し進める原動力となっています。同時に、新たな投資優遇措置である「大型投資奨励制度（RIGI）」が同法により導入されました。RIGIの登場は、厳しい資本取引規制によりアルゼンチンから遠ざかっていた外国投資家の目を再びアルゼンチンに向かせることとなり、現在、リチウムや銅といった鉱物資源の開発への関心が高まっています。

弊事務所はこの機会を捉えて、アルゼンチンにおける鉱業分野でのビジネス機会を探求する取り組みを行いましたので、その一部をご紹介します。

<サルタ州、カタマルカ州の鉱山開発の現場を視察>

アルゼンチンでは、地下資源の所有権は、連邦政府ではなく州政府に帰属します。また、各州の法律は鉱山開発事業者に対して、鉱山開発や鉱山の操業に必要な資機材やサービスを一定以上、州内に所在するサプライヤーから調達することを義務付けたり、鉱山開発への州政府の資本参加を義務付けたりしている州もあります。そのため弊事務所は、鉱山開発の現場視察だけでなく、州政府との関係構築や鉱山に資機材やサービスを提供するサプライヤーとのネットワーキングを通じて、日本企業のビジネス機会を探る場を設けることにしました。

サルタ州、カタマルカ州、フワイ州は、所謂リチウム・トライアングル地帯に立地し、リチウムの産出地とし



カタマルカ州にてガラン視察の様子

て注目されています。サルタ、カタマルカの両州には、銅鉱山の開発プロジェクトもあります。そのため、これら2州を陸路で1,000km移動して、鉱山の開発現場を視察しつつ、州政府や現地関連企業と交流、情報交換の場を設けるビジネスミッションを2024年10月に実施しました。11社・機関から13人がミッションに参加しました。本ミッションでは、州政府や現地関連企業との交流に加えて、サルタ州にある仏エラメットのリチウム開発プロジェクト「センチナリオ・ラトーネス」、カタマルカ州にある豪ガラン・リチウムのプロジェクト「オンブレ・ムエルト・オエステ」、同州にあるスイス・グレンコアの銅鉱山開発プロジェクト「マラ」の3つの開発現場を視察しました。

<サン・フアン州にもビジネスミッションを派遣>

鉱山開発への期待が高まっているのは、先述の3州だけではなくありません。北西部のアンデス山脈沿いに位置するサン・フアン州にも注目が集まっています。同州の鉱業の歴史は浅いものの、州の面積の約8割が山岳地帯であることから、金、銀、銅、モリブデン、鉛、亜鉛などの重要な鉱物資源を豊富に有し、国内で最も重要な10の銅鉱山開発プロジェクトのうち、6つが同州に集中しています。

2025年5月に同州を視察するビジネスミッションを派遣しました。5月に入ると標高の高い鉱山開発の現場は降雪によりアクセスが困難なため、残念ながら現場視察をアレンジすることはできませんでしたが、21社・機関から31人がミッションに参加しました。州

政府、鉱山関連団体との交流に加え、スイス・グレンコアの銅鉱山開発プロジェクト「エル・パチョン」、加マキユアン・マイニングの同「ロス・アスーレス」からプロジェクトの内容について、豪BHP・加ルンディン・マイニングより同「ビクーニャ」の資機材調達方針の説明を受けました。そして最後は、「ビクーニャ」の開発現場が所在する自治体イグレスシアを訪問し、同自治体より主要産業や鉱業の現状についてブリーフィングを受けました。

<アルゼンチンの鉱山は今後も注目産業に>

アルゼンチンにはリチウムはもちろん、大規模な手付かずの銅鉱区があります。こうした鉱区は、アルゼンチンを含むカントリーリスクの高い国にしか残っていないため、日本を含む外国投資家からの注目を集めています。2つのミッションからは、産出された鉱物をアルゼンチンからチリへ陸路で輸送し、チリの港湾からアジア諸国に輸送するための二国間、あるいは州内の道路インフラの脆弱さを指摘する声、高いカントリーリスクを担保するRIGIへの関心の声が多く聞かれました。

銅については加マキユアン・マイニングの「ロス・アスーレス」、リチウムについては豪リオ・ティントがサルタ州で進めるプロジェクト「リンコン」がRIGIの適用を申請しており、後者については本年5月に適用が承認されました。資源メジャーによる銅鉱山開発プロジェクトのうち、どの案件がRIGIを申請するのか、どの案件が最初に開発を開始するのかに関心が高まっています。

アルゼンチンでは2年に1度、鉱業見本市「アルミネラ」がブエノスアイレスで開催されます。今年も5月に同見本市が開催されましたが、識者は、「展示会の様子がだいぶ変わった。海外サプライヤーや外国のナショナルパビリオンが増えた。今年も展示会はBHP、グレンコア、リオ・ティントに注目が集まったが、これらのプロジェクトの実現が現実味を帯びてきた結果、今後はこれら以外のプロジェクトに焦点が当たる展示会になるだろう」と述べており、アルゼンチンの鉱業は、外国投資家の注目を一層集めることになると見られます。

(2025年5月31日 記)

本稿はあくまで執筆者個人の考えを述べたものです。
(にしざわ ゆうすけ：ジェットロ・ブエノスアイレス事務所 所長)

「ブエノスアイレス生活事情」

～ 日本人の住み心地 ～

大迫 淳

ブエノスアイレスで生活する日本人駐在員として感じていることをありのままにお届けします。筆者は2024年4月に赴任し、家族が同8月に到着しました。まだまだブエノスアイレスについて勉強中の身ですが、読者の皆さんがブエノスアイレスでの生活を少しでも感じ取っていただけたら嬉しいです。

ブエノスアイレス市街は、歴史ある欧風建造物と豊かな緑が共存し、治安も良く、非常に素晴らしい場所です。南米のパリと呼ばれる都市に住んでいることを幸運に思います。

一方、日本人が生活する上で不便だな、と感じたのは停電や断水、蝙蝠（コウモリ）被害、犬の糞などですが

大したことはありません。例えば、3か月に一度の停電や稀に断水もあります。蝙蝠が雨戸収納スペースに寄生し糞を落としますので衛生面で心配(3度の駆除で撃退)。特にベルグラノーが多いとの噂ですが、犬の糞が多く、緑で美しい景色を見て歩きたいのに・・・気になって歩けません。先日、妻が踏んだ時は「運が良かったってことでOK!」とポジティブに捉えるように、と家族で合意。

停電や断水の際には、家族や日本人同士で協力して乗り切り、その過程で絆が深まることを実感しますのでも不便ですが、良い機会でもあります(笑)。

為替レートの影響

この4月、公式レートとブルーレートの差が殆どなくなりしました。ブルーレートは24年3月1\$=1,010ペソから24年7月に1ドル約1400ペソでしたが25年5月に1ドル約1150-1200ペソ。私のようにドルをBarrio Chino(中華街)でペソに両替して生活する人にとってペソ高は好ましくありません。

同様、ペソ高でブラジル人観光客は激減し、アルゼンチン人が海外旅行へ出る傾向です。

ミレイ政権のマクロ政策は、IMFや世界銀行など対外的には評価され、アルゼンチンが国として強くなることは喜ばしいですが、行き過ぎたペソ高は日本人の生活にマイナスの影響を与えます。

物価の実感

インフレは直近で3%前後と大きく改善していますが、24年3月から25年3月の1年間でインフレ56%でした。その一方で為替レート(ブルーレート)は24年3月1\$=1,010ペソから25年3月1\$=1172ペソと16%のペソ安でした。インフレと為替レートが同じ率で推移しない故、つまり、ドルの購買力が下がっている故、ドルベースで物価が高くなっています。

日本人の肌感覚として、物価は日本並み、または、それ以上です。スーパーマーケットでコーラ2.25リットル3ドル。マクドナルドでBig Macセットが約10ドルです。レストランではパスタが30ドル。特に外食の価格は日本よりも高いと感じます。この感覚を正確にお伝えすると、2年前の出張時に行ったイタリア料理店のパスタが一皿約10ドルでしたが、現在30ドルします。



日本のファミレスのように、手頃な価格で美味しい食事ができる場所があれば嬉しいのに、と思うことがよくあります。

新しい出来事

1千ペソ(1ドル弱)紙幣に加え、2千、1万、2万ペソ紙幣が導入され、とても便利になりました。携帯アプリやクレジットカードでの支払いが可能です。現金支払いの場合、2万ペソ札は便利です。

また、米ドル紙幣をATMで引き出せるようになりました。法人ではなく個人の場合、ペソからドルへの両替が以前は月200ドルまでだったのですが、無制限になりました。

食材や日用品の調達

日系人経営のMizuhon農園で日本の野菜や米、日系Asahiスーパーで自家製の味噌や漬物、そして薄切り肉を調達できます。車で一時間かかりますが、月に1-2回行く人も普通です。

日系農家が米の配達サービスを実施。米5kgで約3,000円、贅沢を言わなければ十分の品質です。有難いと思います。

カレーのルー、海苔など最低限の調味料はBarrio Chinoで日本の3倍の価格で買えます。

ブエノスアイレス日本人学校の様子

現在の日本人学校の規模は小学1年~中学3年で生徒約30人です。我が家の子供達は日本の小学校より日本人学校の方が楽しく好きだと言います。友達、先生方が優しい、行事の司会などを担う機会が多い、というのが主な理由です。

新制度によりスクールバスルート外の居住が可能になりました。もちろん、親が送迎することが条件です。ベルグラノ(学区内)でアパートを見つけるのに6か月以上かかる人(自分)もいますから改善が期待されます。

ある日本人学校小学4年生のコメントを紹介します。「海外生活の不便な所がいいんだ。だって、日本で当たり前のことに有難みを感じるから。一時帰国が楽しみ。」なんと大人びた発言でしょうか。



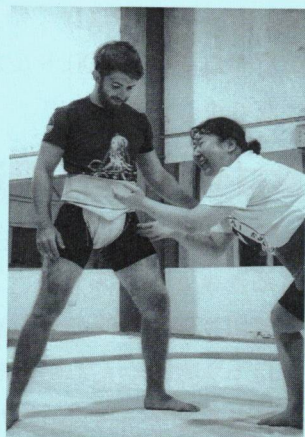
日本人学校 運動会25年5月 太鼓

スポーツ界での日本人の活躍

女子サッカーでは佐々木ユリア選手がボカ・ジュニアーズで活躍中です。2022年慶應義塾体育会サッカー部（サッカー部）に入部。2023年休学し豪エッセン・ロイヤルズとプロ契約し1年間プレー後、2024年3月にボカに加入。



女子サッカー選手
佐々木ユリアさん



相撲選手 今さんと
お弟子さん

また、女子相撲選手の今日和(こん ひより)さんがJICA海外協力隊員として活動されています。

世界ジュニア女子相撲大会で優勝(2014、15年)。現在、約60名のアルゼンチン人が稽古に通っているそうです。

佐々木さんは週に一度、日本人学校の生徒へサッカーを指導して下さっています。今さんは日本人学校での講義や商工会忘年会とトヨタディーラー開所式で実技披露をされました。

日本食レストラン事情

日本食ブームがあり、現地人向け日本食レストランは増えていますが、本格的な日本の味を楽しめる日本人レストランは限られますが、いくつかご紹介します。Ichisouの食事券は昨年の日本商工会忘年会の景品になる有名店。NorimotoやOmakaseなど高級日本食レストランは単身者やブラジルからの出張者にとって重宝。Tori Toriという焼き鳥屋は家族、単身問わず人気です。

一方、我が家ではJumboなどの有名スーパーで生食用サーモンを購入し自宅の手巻き寿司を楽しみます。ペルーレストランでセビーチェを食べることもあります。工夫して現地の「食」を楽しんでいます。日本食は高価格ですし、私達は日本食に対し厳しい基準を課してしまいますし、高い満足度を得ることは難しいけれど、現地の美味しいものを楽しむことも大切にしています。

以上、ブエノスアイレスに暮らす日本人駐在員として個人の感じるままをお伝えしました。現地での生活は不便ですが、日本では得られないような経験もできますし、子供を含め、家族として成長できることも多くあります。

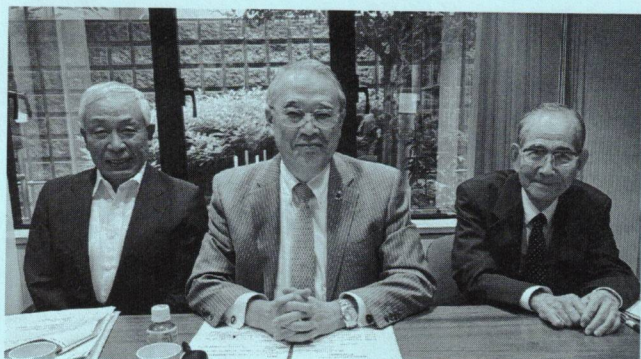
これらの情報が参考になり、最近のブエノスアイレスでの生活や住み心地を感じていただければ幸いです。

(おおさこ じゅん：豊田通商アルゼンチン取締役)



懇親会報告

穴戸 和郎

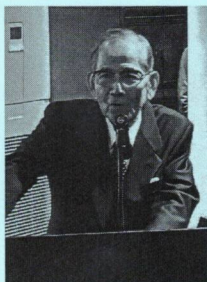


総会の模様

真夏を想わせる暑い日差しの屋間から一転、過ごしやすくなった曇天の下、去る6月6日の夕方、元麻布のアルゼンチン大使館に参集しました。日本アルゼンチン協会の定時総会・懇親会の開催のためです。毎年会場としての使用を許諾頂く、アルゼンチン大使館には感謝しかありません。

定時総会は、例年通り大使館内の図書室で行われ、滞りなく審議が終了しました。その後会場を大使公邸に移し、恒例の懇親会となりました。

所用でご欠席の遠藤会長に代わり、木島副会長が挨拶の皮切りを務め、テンポーネ大使の懇切なるご挨拶、外務省野口中南米局長のユーモア溢れるスピーチと乾杯音頭で会場が温まったところで懇親会がスタートしました。



木島副会長挨拶



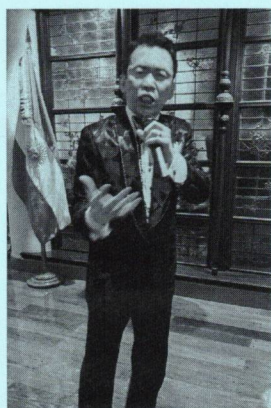
テンポーネ大使
ご挨拶



外務省 野口局長
ご挨拶

シュリンプカクテル、チョリパン、アサード、エンパナーダ、寿司と、お馴染みのメニューにアルゼンチンワインで、参加者みんな舌鼓。前復興大臣の土屋品子衆議院議員からの祝電披露もありました。

一方、「メンターオ」楽団の軽妙な演奏が参加者の耳を楽しませる中、圧巻だったのが、ロベルト杉浦氏（注）の歌唱です。本場で評判をとった圧倒的な歌声で、みんなの食事の手が止まりました。最後には会場を所狭しと闊歩しながらの熱唱に、場は熱狂のルツボと化しました。



ロベルト・杉浦



「メンターオ」楽団



立野雅代と
ルーカス・アーロン

また、立野雅代・ルーカスアーロンのペアによる可憐なfolklore舞踏も会場に花を添えました。

最後には、大使ご自身もタンゴダンスの輪に加われ、華麗な腕前を披露されました。そのまま会場の興奮冷めやらぬ中、無事お開きとなりました。

末筆ながら、アルゼンチン大使館関係各位、日本外務省関係各位、ご参加の皆様のご協力に改めて御礼申し上げます。このイベントが成り立つのも関係各位のお蔭です。また、本年もドン・ロッシ殿よりアルゼンチン牛肉の寄贈を受けました点、申し添えます。



永井理事長の中締め

（注）名古屋出身。若くしてアルゼンチンに渡り、中南米各地でも活躍。タンゴの大歌手、ロベルト・ルフィーノに認められて、「ロベルト」の名をもらう。数々の賞に輝き、テレビ出演も多数。この分野での日本人歌手随一の存在といえる。



（ししど かずろう：当協会常務理事）



総会・理事会報告

阿部 和子

6月6日（金）アルゼンチン大使館小講堂に於いて下記の如く総会・理事会を開催した。

- ・令和7年度第1回理事会 16：20～
- ・第13回定時総会 17：10～
- ・令和7年度第2回理事会 17：50～

第1回理事会では、令和6年度事業報告並びに令和6年度収支決算報告が承認されると共に、第13回定時総会に上程する6議案が原案通り承認・可決された。

第13回定時総会では、第1回理事会で承認・可決された6議案について、審議され、滞りなく承認・可決された。

本年度は理事・監事の改選期に当たり、再任を含めて23名の理事と2名の監事が選任された。

第2回理事会では、第13回定時総会で承認された理事ならびに監事により、遠藤議長から示された役付理事及び業務執行理事の選定案が承認され、新体制がスタートした。

理事：

阿部和子、飯塚久夫、井尻収一、伊藤誠、遠藤信博、勝田富雄、加藤勝巳、川上貴、川崎宏、イレーネ賀集、木島輝夫、穴戸和郎、永井慎也、藤田悟郎、保坂庄司、松本良彦、的場博子、安田衣里、吉村佳人、渡部千秋、※西脇修、※瀬藤芳哉、※室岡光浩

以上理事23名（※は新任）

監事：

横山稔、※吉次博

以上監事2名（※は新任）

会長・代表理事

遠藤 信博

副会長・代表理事

木島 輝夫

理事長・代表理事

永井 慎也

常務理事・業務執行理事

伊藤 誠

同

勝田 富雄

同

川上 貴

同

穴戸 和郎

同

保坂 庄司

同

渡部 千秋

業務執行理事

阿部 和子

同

藤田 悟郎

同

松本 良彦

顧問

荒尾 保一（重任）

同

白鹿 敦己（重任）

同

津島 勝二（重任）

同

鶴岡 忠成（重任）

同

星野 美智子（重任）

同

松下 洋（新任）

（あべ かずこ：当協会業務執行理事）



Resumen en castellano

por Irene Gashu

El atractivo de Argentina (p. 2)

Por Shinya Nagai

Si bien Argentina es un país con innumerables atracciones naturales y gastronómicas, quisiera destacar también los recursos humanos altamente capacitados que tiene. Por ej., el Papa Francisco y el Director General del OIEA. El actual Presidente de Argentina, Javier Milei, también es una persona muy capacitada. Como Japón y la Argentina de Milei, tienen como una de sus bases al liberalismo, es de esperar que las relaciones bilaterales entre ambos países se desarrollen aún más.

Historia del tango en Japón. Parte 2 (p. 2)

Por Hisao Iizuka

En 1953 y 1954, Ranko Fujisawa y Shimpei Hayakawa visitaron Argentina. De 1961 al 63, el bandoneonista Fernando Tell tocó en vivo, radio, TV y grabó un disco en Japón. Después de 1945, el tango resucitó con varios programas de radio. En 1958, Toshiba Records lanzó la compilación "Este es el tango porteño". Hacia 1950, había 22 orquestas de tango en Japón. Hubo una época en que existían 15 cafés de tango en Tokio. Los años 50 a 60 fue la época de oro del tango en Japón.

Desde JETRO Buenos Aires (p. 5)

Por Yusuke Nishizawa

Gracias a la administración del Presidente Milei, la economía argentina se está estabilizando gradualmente. Aprovechando la implementación del RIGI, JETRO organizó en octubre de 2024, una misión de empresarios japoneses con el objetivo de explorar oportunidades de inversión y cooperación económica en el sector minero. La delegación visitó un proyecto en Salta y dos en Catamarca. En mayo de 2025, otra misión visitó proyectos en San Juan. El interés de los inversionistas extranjeros en la industria minera argentina sin duda va a aumentar.

Viviendo en Buenos Aires (p. 6)

Por Jun Osako

Voy a contarles cómo es mi vida en Buenos Aires. Los cortes de luz o de agua, el excremento de murciélagos en los cajones de persianas y de perros en las calles, son un poco molestos. Los precios han subido. Salir a comer es más caro que en Japón. Resulta conveniente la emisión de billetes de 20.000 pesos. A mis hijos les gusta más la primaria del colegio japonés en Argentina que el de Japón. La jugadora de fútbol, Yuria Sasaki y la luchadora de sumo, Hiyori Kon, se desempeñan en Argentina. Ichisou, Norimoto, Omakase y Tori Tori son restaurantes de comida japonesa.

Fiesta de nuestra Asociación (p. 8)

Por Kazuro Shishido

El pasado 6 de junio se celebró la Asamblea General de nuestra Asociación y seguidamente se realizó la fiesta en la residencia del Embajador Eduardo Tempone. Los asistentes pudieron saborear cócteles de camarones, choripanes, asado, empanadas, sushi y vinos argentinos. El broche de oro de la velada fue el cantante japonés de tango Roberto Sugiura con su impactante voz, acompañado por el Quinteto Mentao.

編集後記

今回も素晴らしい寄稿を頂いた各位に厚く御礼申し上げます。飯塚様のタンゴの歴史も第2回目で佳境に入ってきました。亜国豊田通商大迫様の寄稿からは、日本駐在員の今がビビッドに伝わってきます。JETRO ブエノスの西澤様、いつも貴重な情報をありがとうございます。

当協会は、昨年10月に新事務所に移転をしております（電話番号等は変わりません）。ご留意下さい。

(編集長)

会員の皆様からの自由なご意見、情報、原稿投稿をお待ちしています

投稿先：E-mail: nippon@argentina.jp

Fax: 03-6809-3682 電話 03-6809-3681 担当：阿部

* 住所変更の連絡もこちらへ宜しくお願い致します。

令和7年度 年会費納入のお願い

本年度（令和7年4月1日～令和8年3月31日）の年会費のお支払いをまだ済まされていない方は、早めのお手続きをお願い申し上げます。

個人正会員：1万円

個人賛助会員：5千円

日本アルゼンチン協会会報 第75号

2025年7月10日発行

発行人 永井慎也（当協会理事長）
編集長 穴戸和郎（当協会常務理事）
編集発行 一般社団法人 日本アルゼンチン協会
〒105-0012
東京都港区芝大門2-2-17
電話：03-6809-3681
FAX：03-6809-3682
E-mail：nippon@argentina.jp
URL：https://argentina.jp/
印刷 株式会社 イデア・インスティテュート

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。